

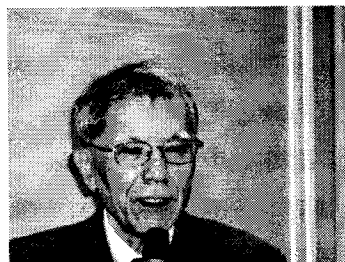
巡礼の街パリ：サンジャックの塔を中心に (ランスへの調査を含めて)

愛媛大学客員教授

岡村 茂

はじめに

パリ Paris とは不思議な言葉だが、この語源は調べると面白い。文献によると、紀元前 3 世紀、リュテシア Lutetia 地方のシテ島 la Cité に最初にパリジイ Parisii という漁業を営みとするケルト系の種族が住みついたという。サンジェルマン教会がセーヌの左岸、ノートルダム大聖堂がシテ島という風に、パリは大宗教都市として発展を遂げる。フランスは我が国の近代化にも重要な影響を及ぼしている。中規模の国ながら、実際に国際的な影響力は今でも無視できない。しかもその栄光と影響力とは一重に歴史都市としてのパリによっていると申してもあながち言い過ぎではなからう。分権化理論の信奉者として事実の問題は否定しえない。パリの歴史性を確保している重心の部分にカトリシズムがあることもこれまた無視しえない事実であろう。



大革命と共和制：非宗教性の原理

アメリカによる支援と育成のもとに生き延びておきながら、日本人の大半は根本的には西欧、特に独仏に心を寄せていたというのが不思議な戦後の精神世界だった。

ドイツは東西に分割され、敗戦でひどく打撃を受けた。政治的にレジスタンスなどで戦勝国の側に立ったフランスは、欧州大陸の西半分を代表する国家として、戦後は常にアメリカ中心のいわゆる「グローバリズム」に叛旗を翻してきた。今日の大EUは実にドイツの経済力をバックにしたフランスの政治外交力の産物である。

17世紀における30年戦争の終結によりウエストファリア条約〔Peace of Westphalia, 1648年〕の名で知られる西欧国際政治体制を確立し、ブルボン王朝は大陸での指導権を手にする〔ハプスブルクの相対的な後退であり、イギリスは局外にたちつつ植民地の拡張に注力する〕。17-18世紀、パリ郊外のヴェルサイユ宮は欧州外交の中心となる。各国の宮廷は競ってフランス風に染まった。

同時に数百年を費やして作り上げられていたノートルダム大聖堂〔1163-1345〕は更に意匠をこらし、カトリック・バチカンの出城として、パリの中心部で繁栄を極める。ブルボン王朝はハプスブルクと並びたち、やがて近世にいたるとそれをしのぐ大国として振る舞い、カトリックの西欧における守護者として自ら任じ、王族のためにその他の数々の立派なカテドラルが造営される。

今日でも、フランスの「アメリカニズム」への異論には、欧州国民（英国はフランスにやや距離をとっているが）や第三世界の人々はこれを支持することが多い。ユネスコをはじめ国際舞台では今でも主要な公用語は英仏両語なのである。フランス人の反アメリカ感情の背景には失われた帝国への憧憬と、アングロサクソン世界に閉塞したイギリス国教会やアメリカ清教徒への異端排除の意識、あるいは微妙な「違和感」があるといえは言い過ぎだろうか。

フランス革命は貴族・王族支配の完全否定にまで激化し、われわれ日本人には想像が及ばないのだが、カトリック教会への大量略奪や迫害が一般化する。王権と癒着したローマン・カトリック教会の旧体制におけ

る政治権力との癒着と信仰をテコにした領域支配（教導権）は、日々の労働の成果をうばってゆく不合理な身分体制への憎悪と不満とを人々の中に蓄積させたのであった。

人権宣言にもあるように、思想信条の自由が宣言され、共和制の国家はいずれの宗教にも加担しないことを宣言し、「非宗教性」が共和国の基本原理となる¹。

今回の調査（2009年1月）では、ランス-パリ-モンサンミシエルと廻って、レンヌ〔ブルターニュ半島の主要都市〕から長駆TGVでリオンへ、そこからややローカルな線でディジョンにまで北上した。最後の大南下の旅程は、ざっと6時間ほどの高速鉄道の旅であった。ディジョンでも古い寺院の見学をブルゴーニュ大学の知人の案内ではたせた。翌日は、ブルゴーニュ大学法学部長が昼食会を組織してくださった。その際に、いまなぜ「遍路と巡礼」という根本的な疑問が相手側から出された。共和制原理としての非宗教性を論拠とするものである。内田九州男教授が主として答えられて、私がささやかな翻訳をさせていただいたが、実際、録音をしておけば良かったという堂々たる内容であった。

人は生と死の問題から逃れられない。その場合、聖地をめぐる、あるいは聖地を目指す、あるいは巡礼路を回遊する旅は、魂の清めという感覚を覚醒させる。政治体制とはかかわらない、更には宗教宗派には関わらない、人間の根源的な存在の意味をといかける行為である云々という国際的に通じる骨太の論点であった。フランス側の応答は、巡礼ということは良く知られたことではあるが、現代の私たちには何よりも健康のためのトレッキング、スポーツとしての歩きというイメージが強いとのことだった。共和主義にこだわる学部長は、非宗教性原理がもっている合理性を指摘したがっている風だった。



1ブルゴーニュ大学法学部主催の昼食会にて

フランス人の生活習慣の変容—宗教的な巡礼から健康志向のトレッキングへ

上に触れたように、フランスでも巡礼の意味合いが中世以来の宗教的な行い²から、徐々に意味変容してきた。第一に、宗教的な信条にかかわらず、健康志向や知らない土地に行ってみようというエクゾティズムから若者の参加が増えている。コンポステラへの巡礼者の数は増大している。1999年には10万人が到着し、2004年には20万人にまで増大したという。徒歩、自転車、時に馬による巡礼である。第二に、したがって、小道の整備においては、巡礼というよりも、行政的な表看板としてトレッキング道として整備される傾向があるということである³。

EUレベルでは、欧州大トレッキングルートSentier européen de grande randonnéeとして11の大横断・大縦断のルートが整備されている。そのうち、E3ルートが、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、スロヴァキア、ポーランド、チェコ、ドイツ、ルクセンブルク、ベルギー、フランス、スペインという最終的にはコンポステラ巡礼道に重なりあいつつ欧州を弓なりに横断するルートとして設定されている。E3ルートの全長は6300キロに及ぶ。

もちろん、フランスでの状況を申せば、毎日曜日に礼拝にカトリック教会に通う人々の数が激減している。プラクティシアン〔宗教的祭祀に参加し実行するひと〕が急激にフランス社会のなかでマイノリティー化しつつある。80年代の留学時代、日本人カトリック会のバス旅行で廃虚になってしまい普通は入れないような中世の修道院なども詳しくまわることが出来た。主要都市であろうと小さな村であろうともカテドラル〔シャペル〕では日曜日には礼拝が行われている。しかし、歴史的に由緒ある立派な聖堂の中に入ってみると、前の2列にだけ礼拝の信者さんがいたことが、今でも脳裏に焼き付いている。教会離れはすでに深刻化

していた。種々の統計を総合しているネット情報を見れば、フランス人の大体60%がカトリック信者であると答え、そのうち5%が日曜ごとに教会での礼拝に参加しているという。無宗教との答えは、27%程度である⁴。死者を弔う儀式の場としてのみ利用され、ふだんはカトリック教会組織は敬遠され神棚に祭られるという傾向がある。宗教から健康と環境という新しいシンボルへの移動がグローバリズムのなかで一般化していて、その点、保守的に見えるフランスでも事態はかわらない⁵。

80年代初頭の留学先はパリの政治学院IEP（シヤンス・ポ）であったが、学舎はサンジェルマン・デプレ教会から5分ほどのところである。偶然にも門前町の教育機関に通っていたことになる。第三共和制から続く行政・経営系エリートの殿堂みたいところで、そこから研究者への道を選んだり、国立行政学院ENAに進学して、高級官僚・外交官への道を選ぶ人もいる。当時の主流は行政学や政治社会学であったが、現在では改組が進んでいて、アメリカ流のビジネススクール化しているという。もちろん往時の教養主義的な、あるいは文人支配の気分が残っている政治学院を懐かしむ人もいる。われわれの精神生活に巨大な石材による伝統ある寺院は大きな影響を与えていた。セミナーのフランス人院生の仲間と話していても、古い街区に住んでいるものはそれを誇りにしている風だった。

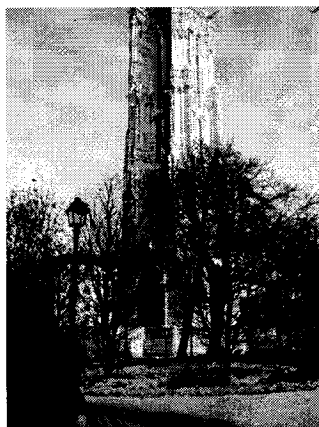
パリ：巡礼の出発拠点

フランスの巡礼路は、ヴェズレイVézelay（ブルゴーニュの宗教都市）⁶からの中部フランス経由のルートやル・ピュイ Le Puy やアルル Arles からの南部ルートが有名だが、それと並んで、パリからの巡礼路を忘れてはならないであろう⁷。サンチャゴに至る巡礼路は基本的にフランスの宗教的な拠点を出発点にしているが、外国人のサンチャゴ巡礼者のなかでフランス人がとりわけ多かったことは想像に難くない。したがってこれらルートが、「フランス人の道」と呼ばれたことも納得ゆくことである⁸。

はじめに触れたように、シテ島とサンルイ島を中心にパリができた。だからこの辺がパリー区から四区の中心部である。シテ島の北側に、パリ市庁舎とサンジャックの塔がある。この塔は、もともと16世紀の教会 Saint-Jacques-de-la-Boucherie の鐘つきの塔であった。古記録によれば、シャルルマーニュ大帝〔8-9世紀初頭に王位〕がそもそもこの教会の基礎を据えたとある。しかしもちろんその頃なら様式はロマネスクだったろうから現在は何の痕跡もない。

この鐘つき堂としての塔は、1509年から1523年にかけて、ジャン・ドゥ・フラン Jean de Felin, ジュリアン・メナール Julien Ménard, ジャン・ドゥ・ルヴィエ Jean de Revierによって創建された。塔上に福音のシンボルとしての立像〔ライオン、牡牛、鷲、それにひと〕と共に、ひとつの^{サン}聖ジャック像が立てられる。ここからはるかスペインのコンポステラに向けて巡礼の旅が始まる。巡礼はここからパリ南部に向けて出立したのである。教会

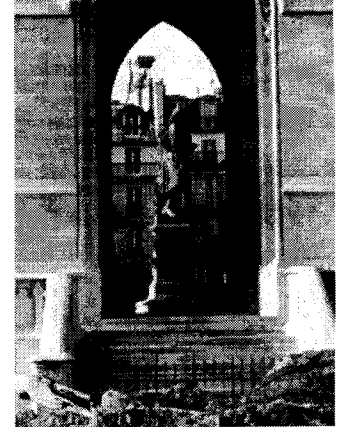
は1793年の大革命期に破壊され、塔のみ残る。その後は气象台などとして使われた。パスカルが空気圧の実験をしたとしてそれはそれで著名である。塔はたいまつを意味する火炎が立ち上がった



2 サンジャックの塔



3 サンジャックの塔



4 サンジャックの塔の基部にある科学者パスカルの像

意匠のゴシック建築であり、もとの教会の遺構がそこだけ残ったのである。

19世紀の半ばに解体修理され、大革命で破壊されたサンジャックの立像が付け加えられた。

1965年、スペイン政府からコンポステラ巡礼への出発点と正式にみとめる銘板がパリ市に贈られた。

1998年に巡礼道にかかわる他の70の建造物とともに世界遺産に登録されている。

私たちのパリでの巡礼道の現地調査はまだ詳細には渡っていない。確実なのは、このサンジャックの塔からほぼ真南に向かって、オルレアン門にくだり、そうして、パリを出るとイール・ド・フランスのなだらかに起伏する道をオルレアンに向かうのである。しかし、近代式のまっすぐの街路を昔の巡礼が歩んだとは考えられない。古い裏道にヒントがありそうだ。

パリの街区はオスマン男爵によって第二帝政期に大幅な市街区の整理〔場合によっては打ち壊し〕が行われ、今日見るような主要道路の拡幅と広場に向かっての放射状の交通体系ができていく。だが、注意深く観察すると、大幹線道路の傍に古い街区が残っている。このうねうねと曲がりくねった狭い道をただ一点の星であるコンポステラに向かって人々は歩んだのであろう。

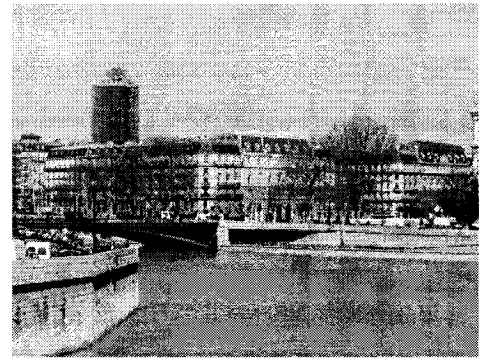
今回は、サンジャックの塔からパリ市庁舎に行く。冬だったので、西正面にスケートリンクを敷設して、ガラス張りのレストハウスを造っていた。パリ市も商売がうまい。ネオルネサンス様式で1533年の創設という。その後は革命の嵐に翻弄される。常に政争の場として登場する。ついに1871年5月24日のパリ・コミューンの最後とともに焼失。第三共和制期に再建される。留学中にフランス人に誘われてコンサートがあるというので入ったことがあるが、インテリアは優雅な古色を備えた立派な建物だった。維持に大変だろうなという印象を得た。日本の若い女性（ほとんどまだ少女の印象）がフルートのコンペでグランプリを得て、記念に演奏した。か細いが澄んだ音だった。パリは音楽家の街でもある。街頭で演奏する人々も多い。中には地下鉄に乗り込んでいきなり南米のリズムが車内にあふれかえることもある。小銭を市民は投じている。駅内での演奏も最近は余り見かけない。季節差があるのだろうか。

先ほどのべたノートルダム大聖堂に入る。

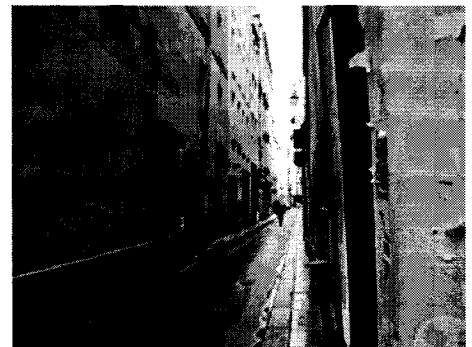
つぎにサント・ジュヌピエーブの丘に登り、パンテオンのかたわらを通ってサンジェルマン教会に至る。こちらが最古のパリの修道教会である。すべてのカトリック信仰はこの地味なロマネスクの色合いの濃い修道院から始まった。廻りは、広大な荘園だったという。

パリからオルレアンに向かうのがオルレアン街道であり、その出口がオルレアン門である。19世紀までは意味をもっていたパリを囲む城壁も軍事的な存在意義を失い、とくに1930年代の大戦間時代には時の反戦的な国際世論を反映してロックフェラー一族の音頭により国際大学都市Cité Internationale Universitaire de Parisが建設される。1980年代初頭にその西端の建物に住んでいただけに、オルレアン門周辺は思い出が深い。

画像で、まずオルレアン門周辺の街区を見ていただきたい。特に赤いレンガに注目していただきたい。膨大なパリ守備の城壁は取り壊され、その土地は公営市民アパートなどに転換された。この外壁にかつての城壁が記念に素材として廃物利用されていて、一定のデザインともなっている。ちなみに、ヴォージュ広場を



5 サンルイ島から遠望した工事中のサンジャックの塔(2003年)



6 サンジェルマン・デプレ教会裏の古い市街

除いて、パリにはこの式のアパルトマンの他にはほとんどレンガ造りの建物は無い。レンガを多用したバラ色の南都トゥールーズとは大きな景観上の差となっている⁹。



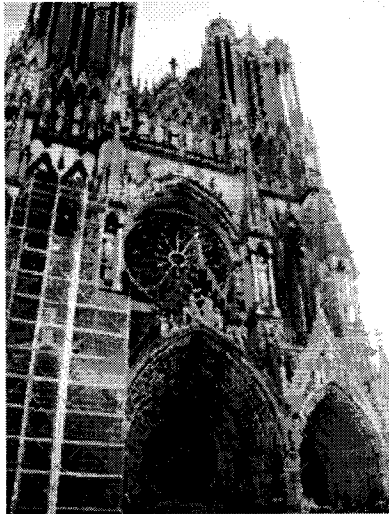
7 オルレアン門附近のアパルトマン
(2006年撮影)

あとがき

2008年12月初頭に、愛媛大学では日仏修好の150周年を記念する国際シンポジウムが催された。はるばる招きに応じて友人達もフランスからかけつけてくれた。ブルゴーニュ大学や政治学院関係の法律政治系の先生方、それに国立統計経済研究所INSEEの方たちと共に、国際交流を満喫できるとても愉快な一週間だった。大変にハードな仕事だったが、沢山の皆さん方に御支援いただき、松山という地域や愛媛大学を押し出すことが出来て、意義深い催しであったと考えている。さて、その直後の2009年1月にフランスでの遍路と巡礼の調査旅行であった。極寒のなかでの調査行であり、しばしばカフェで暖をとらねばならなかった。

パリに到着の翌日はランスへTGVで直行した。ランスは良く知られている通り、シャンパーニュ地方の首都（人口20万）であり、ランス大聖堂（現存のゴシック建造物は13～15世紀）によって世界に知られている。この都市はやはり広義の巡礼経路に含めるべきである。ルクセンブルグなどから西南に下って、パリに達し、更にサンチャゴに至る巡礼の経路として重要拠点である。風格ある北のカトリック聖都であり、このカテドラルは他を威圧して大きい。第一次大戦における空爆の犠牲となった歴史的な構築物であり、いまだに修復の作業が続く。

非宗教性を国是とするフランスが、もっとも熱心なカトリック遺構の守護者となっている。



8 ランス大聖堂のファサード（正面）



9 ランス大聖堂司教館の船底天井

1 Rapport au Président de la République, *Laïcité et République*, Commission présidée par Bernard Stasi, La documentation française, 2004. 特に同書、p.25以下。絶対主義フランスの国王はランスにおける聖人への儀式、地上における「神の副官」というイメージにつながり、カトリック教会と国家の関係は、当然ながらフランス王国における臣民すべてに適用された。革命の指針となった人権宣言は、第十条において、「なんびとも法律によって確立された公共秩序を乱さない限りにおいて、自らの宗教、信条の表明につき妨げられることなし」と規定している。国家の非宗教性が闡明せられたのである。

2 Denise Péricard-Méa, *Les Pèlerinages au moyen age*, Gisserot, 2002 . 同書によれば、今日の「巡礼^{ベルリナージュ} pèlerinage」

という語は、本来は、「行列をなして行進すること procession」とかつては同義であったという (p.11)。

「^{ベルラン}perlin 巡礼者」の原義は、「国外逃亡者」、「他^{よき}の土地に行くもの」であったという。

関哲行はいう。「自らの意思でさまざまな霊場を巡拝しつつ聖地をめざす巡礼者にとって、巡礼行は日常生活圏を離脱し、聖遺物の横溢した「聖なる空間」すなわち「異界」へ参入すること、別言すれば物的世界の保護を離れた「異邦人 peregrinus」、「神の貧民」となることを意味した。巡礼者のもつ半俗半聖の身分、…。イエスの苦難の道の追体験でもあったこうした「信仰の旅」を基本としながらも、サンティアゴ巡礼にはつねに余暇（観光）の要素が付着していた。…内面的「純化の旅」との定義は一面的である。むしろそれは信仰と余暇の両義性において、捉えられねばならない。」（「中世のサンティアゴ巡礼と民衆信仰」、『巡礼と民衆信仰：地中海世界史4』歴史学研究会編、青木書店、1999年、pp.135-136）

3 現代的なトレッキングガイドとして、以下を参照。

Jean-Yves Grégoire et al., *Le Chemin de Vézelay*, Rando éditions, 2004; *Topo-Guide, Sentier vers Saint-Jacques-de-Compostelle via Vézelay*, 2004.

併せて以下を参照。水谷チセ子『フランスの田舎道：巡礼の道をたずねて』文藝書房、1998年。日本人による紀行文として息遣いの良さが好感をよぶ作品である。

4 "Religion en France", in *Wikipédia: L'encyclopédie libre*. 統計はこのインターネットの万有辞典によった。

5 もちろん、良く知られているように、フランスは植民地主義の負の遺産にも悩まされている。カトリック教会の教義に十分な理解を示さず、また、それ故にというべきか、大革命の原理をも相対化しようとするエスニシティ集団が増えている。イスラームの教えを護る人々である。矛盾は共和制の下に於ける非宗教性原理を堅く守ろうとする公教育の場での「スカーフ論争」となって顕れる。内藤正典、阪口正二郎編著『人の法 vs. 神の法：スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』日本評論社、2007。

6 本格的な仏文の史書として、Bernard Pujot, *Histoire de Vézelay*, Perrin, 2000. 冒頭に言う。「マドレーヌ寺院の鐘は旅人を導き、その音は彼方より聞こえる。それがどの方向からであっても。旅人はまるで魔法にかかったかのごとく引き寄せられる。」（同書、p.7）

Édith de La Héronnière, *Vézelay: L'esprit du lieu*, Petite bibliothèque Payot, 2006.

Jaques d'Arès (dir.), *Vézelay et saint Bernard*, Dervy, 2002. 本書は、聖地巡礼の出発点であるとともに、第二次十字軍の進発点であったこの丘の上の聖地を多面的に読み解いている。

7 コンポステラへの巡礼路は狭義には、これら四都市からピレネー越えでスペイン北部をたどることになっている。しかし、イタリア、ベルギー、ドイツ等のその他の国々からの巡路も広義には含める場合がある。特に、ランスの場合は、トリール、ルクセンブルグなどからパリへの重要通過点である。

8 関哲行『スペイン巡礼史：「地の果ての聖地」を辿る』講談社現代新書、p.113以下。

9 パリ全体の街区や眺望を論じる上で、以下は常に変わらぬリファレンスである。

Yann et Anne Arthus-Bertrand, *Paris vu du ciel*, Chêne, 1990; *Paris: Atlas par arrondissements*, Michelin, éditions des voyages, 2003; *Le Guide Vert: Paris*, Michelin, éditions des voyages, 2003

（もちろんパリに市街電車が導入されて以来、共に新版に買い替えなければならない時期である…）

